

2016年3月30日

資料館通信 第68号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮1-2-11 TEL 049-261-6065
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央2-19-5 TEL 049-263-3111

ミニ展示&小学校3年生体験学習「昔のくらしと昔の学校」終わる!

1月12日から2月28日まで上福岡と大井の両資料館で開催していたミニ展示&小学校3年生体験学習「昔のくらしと昔の学校」が盛況のうちに終了しました。

小学校13校の先生、児童の皆さん、見学ありがとうございました。これからも見学、体験の成果を学習に生かしていただければと考えます。多くの方々のお見学与資料館友の会及び水引の会のご協力に感謝します。



はたおり体験



むかしの道具を見てみよう



むかしの小学生に变身!

写真展 ふじみ野の「一丁目の夕日」展 3/30~5/15

昨秋の特別展で展示しきれなかった昭和時代の貴重な写真を展示します。かつて駅前にあった武州ガス上福岡工場、上福岡駅周辺の商店街、にぎわう大井ショッピングタウンなど、昭和30~50年代のふじみ野市の姿がよみがえってきます。思い出のある方はぜひお聞かせください。



大井ショッピングタウン 左：昭和40年代、右：昭和50年代



上福岡駅周辺(昭和43年)

歴史コラム 戦国時代末期のふじみ野市域 ～河越城と岩付城の間で～

戦国時代の真ただ中、天文14(1545)年7月から始まった河越城(川越城の旧称)をめぐる北条氏と古河公方足利晴氏・関東管領山内上杉憲政・扇谷上杉朝定の連合軍との合戦は、翌年には北条氏康(戦国大名北条氏の三代目当主)の軍勢の奇襲攻撃により、連合軍の敗退に終わりました。武蔵国中央部に位置する重要な軍事拠点であった河越城は北条氏が完全に掌握し、現在のふじみ野市域にあたる福岡郷・川崎郷・大井郷などは北条氏の勢力圏に入りました。

それから40年間、北条氏は関東各地に勢力を拡大し、その支配体制は強固なものと思われましたが、天正14(1586)年に最高権力者の太政大臣になった豊臣秀吉は北条氏に服属を要求しました。天正17(1589)年10月、豊臣秀吉に服属する真田昌幸と北条氏が上野国(現在の群馬県)で戦闘状態になると、秀吉は北条氏による反逆と決めつけ、翌天正18(1590)年1月に秀吉は関東を制圧するための全国的な軍事動員を行いました。

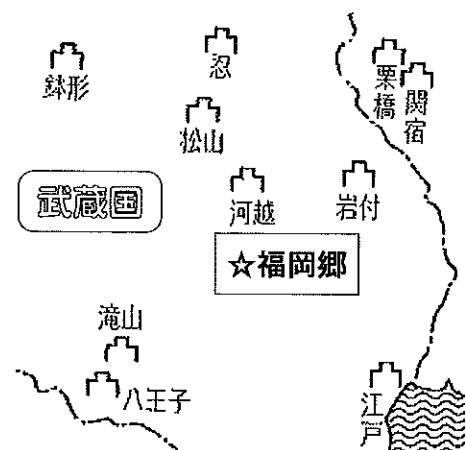
来襲する豊臣秀吉軍を迎え撃つ体制を本格的に固めていた北条氏は、同年1月11日付けで福岡郷(現在のふじみ野市)に兵糧米(兵士の食糧)の確保を命じ、それに関しては郡代も干渉してはならないとしました。なお、郡代とは、河越城を任されていた北条氏有力家臣の大道寺政繁のこととされています(黒田基樹「河越城将大道寺氏に関する考察」『戦国大名北条氏の研究』所収を参照)。

豊臣軍襲来の時は、河越城を中心に大道寺政繁の下に兵士も兵糧も集められ、防衛体制を固めていたというイメージがあります。実際に大道寺氏が河越城に配置されたと思われる永禄2(1559)年以降、城とともに城下町を整備し、周辺地域の支配体制を整備しました。しかし、ここでは政繁による兵糧徴収に関する干渉が禁止されており、福岡郷は河越城の防衛体制から切り離されていた形跡が認められます(「武州文書」福岡村吉野又六家文書『上福岡市 通史編上巻』等参照)。

そのことがさらに明確になるのが天正18年2月21日に北条氏から福岡郷に出された「禁制」です(「武州文書」福岡村吉野又六家文書)。禁制は豊臣軍来襲を前に治安を維持するために出されたもので、郷内での乱暴や田畑や竹木の略奪などを禁止し、違反する者は北条氏の関係者であろうと捕え、「岩付当番頭」に報告することを命じました。「岩付」は北条氏の有力支城岩付城(現在のさいたま市岩槻区)のことで、当番頭は岩付城に詰めていた武将のことと思われます。つまり福岡郷の治安維持の権限は河越城の大道寺政繁ではなく、岩付城に任されていたこととなります。それでは、なぜ河越城ではなく岩付城なのでしょう。

翌3月18日、豊臣軍に属する上杉景勝・前田利家・真田昌幸の軍勢が関東に侵入しました。最前線の松井田城(現在の群馬県安中市)を守っていたのが大道寺政繁であり、政繁の軍勢の主力は河越城には配置されていなかったと思われます。

天正17年には鶴間(現在の富士見市鶴馬)には岩付城主北条氏房家臣の原兵庫助の領地が確認され、古谷本郷(現在の川越市)に拠点を持つ中筑後守は岩付城に拠る岩付衆の一員でした。河越城周辺の府川(現在の川越市)でも岩付領の検地が行われるなど、河越城周辺地域と岩付城とは深い関係がありました。福岡郷への禁制は、一種の戦時体制下の非常措置と思われませんが、岩付城と河越城周辺地域との歴史的な関係を北条氏が意識して出したものと見るができます。なお、4月から5月にかけて河越城も岩付城も落城し、7月には北条氏も豊臣秀吉に降伏しました。



河越城周辺図(『新編埼玉県史 通史編2』に加筆)

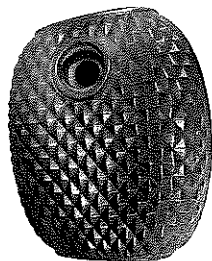
戦後70年企画展「戦時中の暮らし」資料紹介

生産者別標示番号（統制番号）のついた陶製代用品2点紹介します！

平成27年度は、戦後70年ということで企画展「戦時中の暮らし」展を上福岡歴史民俗資料館で、6月13日～8月16日、大井郷土資料館で10月3日～12月6日まで実施した際に、戦時中の金属不足による陶製代用品を展示しました。その中には、昭和15年8月ごろから昭和21年ごろの間に生産されたものに、生産地ごとの略称、産地ごとに生産者（窯元）を特定する生産者別標示番号（統制番号）がつけられたものがありました。そのうち二点紹介します。

湯たんぼ（万古焼）

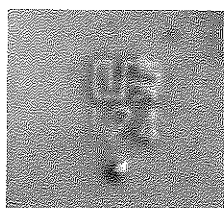
湯たんぼは、もともと「たんぼ（湯婆）」と呼ばれ、湯の意味が含まれていたのが忘れ去られ、「湯」の字を加えて「湯たんぼ」と呼ばれるようになりました。現在のところ最初に文献に現れるのは、文明16年(1484)、出土品で最古のものは、岐阜県多治見市小名田出土の「黄瀬戸織部流し湯たんぼ」になります。江戸時代以降の伝世品は、大部分が金属製のものであり、陶器製の湯たんぼが本格的に造られるようになったのは明治時代以降と考えられます。このように戦前にも陶器製の湯たんぼはありましたが、今回紹介する湯たんぼは、全長25.3cm、最大幅21cm、両端がそれぞれ長径13.3cm、13.6cmの楕円形につくられ、形状は、凹凸幾何文様波付き亀の子代用品形とされるものです。両端に「長」「壽」の陽刻があり、その一方には、陰刻による「万82」という統制番号が刻まれています。戦時中に万古焼のいずれかの生産者（窯元）によって生産されたものです。残念ながら生産地に記録が残っておらず、生産者は不明です。



凹凸幾何文様波付き亀の子代用品形湯たんぼ。本来は金属製です。



湯たんぼ端部。「長壽」の陽刻と「万82」の陰刻



防衛食容器底面。「岐124」の陽刻

防衛食容器

防衛食容器とは、第二次世界大戦がもっとも激化した昭和18年頃、金属やガラスの不足に伴い、缶詰の代用品として、陶器会社が特許を取得し、岐阜県や佐賀県の陶器会社も容器の製造に携わったことで知られています。「防衛食」の製造、販売については、大日本防衛食糧株式会社が統括し、中身は、肉野菜煮、魚野菜煮、味付けの魚類、塩漬野菜、野菜煮、サツマイモやジャガイモのクリーム煮、うどんの七種がありました。本来は蓋があって、容器本体との間にゴムパッキンをはさみ、しっかり圧力で密着させて、熱湯に浸した後、冷水に浸し、容器内を真空（減圧）状態にしました。開封する時は、蓋の中央部にある窪みをクギなどでつついて割り、空気を入れて開封する仕組みになっていました。

今回紹介する防衛食容器は、蓋はなく、口縁部が一部欠損しています。口縁縁帯の幅が8mm、器高9.3cm、口径8.3cm、底径5.5cm、1.1cm角くらいの文字で「防衛食」と染付けがされ、その左



防衛食容器

側に「大日本防衛食糧株式会社」「小澤専七郎謹製」と5mm角ほどの文字が染付けされています。底面には「岐124」の陽刻が施され、容器の生産が、西南部陶磁器工業組合に所属する多治見市笠原町所在の加藤代吉（敬称略。美濃陶磁器歴史館のご教示による。）という窯元で行われたことがわかっています。

ふじみ野市の両資料館への資料の寄贈

平成27年6月から平成28年2月まで次の方々より、各種の文化財資料を寄贈していただきました。紙上をもって厚くお礼申し上げます。

市立上福岡歴史民俗資料館分

- 6月30日 教科書、学習雑誌（中1コース、中2コース、中3コース）
軍杯、民具、古文書一式
市内 粕谷正臣氏
- 9月10日 図書 320点
上福岡図書館
- 10月15日 カメラ（13点）、アンプ部品1点
市内 堀口智氏
- 12月10日 ひな人形一式（山崎人形店）
市内 西澤和子氏
- 12月10日 陶磁器類、火鉢、薬研、
お膳、和傘、その他民具
市内 有山 茂氏

- 1月20日 七五三長着 七才用1点
市内 吉沢妙子氏
- 2月24日 村議会記念灰皿1点
市内 小宅哲夫氏

市立大井郷土資料館分

- 12月18日 けん玉（2点）
羽子板（2点）
羽根（4点）、竹トンボ（3点）
樟脳船（3点）、コマ（5点）
パチンコ（2点）
他、昭和の玩具（82点）
市内 有住教保氏
- 2月19日 カメラ（二眼レフ）一式
市内 有住教保氏

資料の紹介

しょうのうがね 樟脳船

市内在住の有住さんより寄贈を受けました。

昔のお菓子屋さんや祭の露店などで売られていたおもちゃです。

セルロイドでつくられたシンプルなつくりで、クスノキから抽出し衣類の防虫剤として使われていた「樟脳」のかけらを船尾にセットすると、水の上をすいすい進みます。

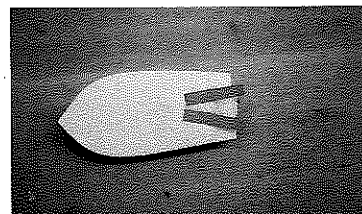
防虫剤成分の主流がナフタリン・パラジクロロベンゼン系になり樟脳が身近でなくなったこと、またおもちゃが精巧になっていったためか、いつの間にか目にしなくなりました。

セルロイド製の船は水に溶けず軽いので浮きますが、水の表面張力で水面に張り付いた状態になります。しかし取り付けた樟脳が溶けて船尾の水面に油膜ができると表面張力が低下し、船首や側面のもとのままの張力のほうが強くなってしまいますので、引っ張られて前に進んだり曲がったりするのです。

水面が油膜で全て覆われてしまうとどこの張力も同一になり船は止まりますが、新聞紙等で水面の油膜を吸い取るとまた進みだします。

材料が初期の合成樹脂であるセルロイドなことから、発祥は明治時代以降であると思われますが、詳しいことはわかっていません。しかしある人が水と樟脳のこの性質に気づき、簡便なおもちゃに仕立てたことは、当時の人が観察力と創造性にあふれていたことを物語っています。

樟脳の取付



進む樟脳船

